

中央アジアの国々

スタンのつく国

ユーラシア大陸中央部のカザフスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス 5 ヶ国は、旧ソ連を構成する民族共和国であったが 1991 年のソ連解体により独立した主権国家となった。現在は「独立国家共同体」（CIS）に加盟している。

中央アジアに「…スタン」とつく国が 4 ヶ国ある。このスタンは、ペルシャ語で「～の場所」、「～の地域」という意味である。今日、ペルシャ語はイランとアフガニスタンのごく一部で使われているが、かつてのペルシャ帝国の勢力を示す地域に地名として残っている。従って、「ウズベク民族の地域」、「カザフ民族の土地」という意味になる。

中央アジア5ヶ国の概要（外務省資料面積と人口 2024、1 人当り国内総生産 21017 より作成）

国 名	ウズベキスタン (共和国)	カザフスタン (共和国)	キルギス (共和国)	タジキスタン (共和国)	トルクメニスタン
国 旗					
面 積	44.9 万km ²	272.5 万km ²	20.0 万km ²	14.1 万km ²	48.8 万km ²
人 口	3636.2 万人	2059.3 万人	718.6 万人	1059.1 万人	749.4 万人
首 都	タシケント	アスタナ	ビシュケク	ドゥシャンベ	アシガバード
主 要 産 業	綿繊維、天然ガス、 金	石油、天然ガス、 ウリ、矽ソ	牧畜業、食品加工	綿花、アルミニウム	天然ガス、石油製 品、綿花
1 人当 り国内 総生 産	2128\$	8585\$	1140\$	819\$	7522\$

かつて中央アジアを総称する地名として、「トルキスタン」、トルコ人の土地がよく用いられていた。一つにまとまった世界で、ムスリム文化のトルコ系民族の生活舞台だった。余談になるが、今日でもトルコ語だけでイスタンブールから中国まで旅を続けられるとトルコ人から聞いた。

この中央アジアを旧ソ連政府は、トルキスタンというイスラム教徒の結束を恐れ、1924 年から中央集権的な社会主義建設を強力に進めるため 5 つの共和国に分断してしまう。今日「スタン」のつく国々は、旧ソ連時代は「スタン」をつけずに「カザフ共和国」、「キルギス共和国」と呼んでいた。そして、ロシア人の大量移住を行い、ロシア化を目指していた。中央アジアの気候はステップ、沙漠が大部分で南部と南東部に高い山脈がある。中央アジアの降水量は年間 150 mm 以下で、日照り、水不足が大きな問題である。人々は遊牧か灌漑農業で麦やトウモロコシを栽培し生活を支えている。

カザフスタン（カザフスタン共和国）

カザフスタンは世界 1 広い内陸国で、北と西はロシア、東は中国、南はキルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタンと国境を接している。中央アジアの中では政治経済的に安定しており、石油、天然ガスを中心とした資源にも恵まれている。イスラム教徒が多数派を占める国としては世界最北端で、人口 2059.3 万人（2024）、人口密度は世界で最も低い国の一つである。現在の領土は、歴史的に遊牧民や帝国が往来興亡を重ねてきた地域である。ソ連崩壊直前に独立した。



カザフ族の子どもとゲル

アラル海 — 灌漑による環境破壊

カザフスタンとウズベキスタンにまたがるアラル海は、今から 50 年ほど前にはカスピ海、スベリオル湖、ビクトリア湖に次ぐ世界 4 位の面積、琵琶湖の約 100 倍の巨大な湖だった。塩分濃度は 1%（海水は 3.5%）程度で、豊富な漁業資源にも恵まれていた。

半沙漠地帯のアラル海を涵養していたのは天山山脈を水源とするシルダリア川と、パミールを水源とするアムダリア川であった。アラル海からの蒸発量と流入量のバランスがとれており、ウズベキスタンの港町ムイナクには漁業者だけで 1 万人が働いており、魚を加工する工場も数多くあった。ところが、1960 年代、旧ソ連の一部であったウズベキスタンで灌漑用水を取水して大規模な綿花を栽培を始めた。その生産量はソ連の 90%以上を占めていた。学生の頃、自然改造の一つの例として、タシケントやモスクワ周辺の綿工業都市と共に大々的に報じられていたのを思い出す。

ところが、アラル海の生態系を維持できる限界を超えた取水のため、1960 年から 30 年余りで、かつての 60%ほどの 4 万平方メートルに縮小してしまい、琵琶湖の約 40 倍の面積が干上がってしまった。アラル海は塩水湖だから水が減れば塩分の濃度が高くなる。そのためチョウザメはじめすべての魚は死滅し、1980 年半ばには漁業が消滅してしまった。そして、90 年代には、魚類はすべて死滅したと報告された。

また、干上がった湖底には有害化学物質と塩が堆積する沙漠、アラルカン沙漠となった。塩の混ざった大量の砂が、風に吹き飛ばされて 1,000 kmも離れた地域まで塩害が広がっているという。そして、アラル海の消滅は時間の問題となってしまった。

石油、ウラン、天然ガスなどをめぐる争奪戦

中央アジアの石油、天然ガスをめぐる開発や輸出ルート争いは、19 世紀にイギリスとロシアがこの地域の覇権を争った「グレートゲーム」の再来と呼ばれている。旧ソ連時代、輸出はロシア経由

のパイプラインに限られていた。近年は中国がほぼ独力で直通パイプラインを建設し、欧米もロシアを迂回するヨーロッパ向け輸出ルートの開拓を進めている。カスピ海北部や沿岸部のカザフスタンの石油資源は 90 年代から注目され、欧米資本を導入して開発を進めてきた。2016 年の原油生産量は世界第 17 位。旧ソ連ではロシアに次ぐ石油大国である。

カザフスタンはウランの生産でも、カナダについて世界第 2 位。世界生産の 20%を占める。地球温暖化対策で世界的に原発回帰の流れもあり、今後の需要増を見込んで日本企業も開発に乗り出している。トルクメニスタンは天然ガスで注目されている。確認埋蔵量は 7 兆 9000 億立方メートルで世界第 4 位（1 位はロシアの 43 兆立方メートル）である。これまで輸出ルートはロシアが独占していたが、トルクメニスタン東部からウズベキスタン、カザフスタンを経て中国までのパイプラインが完成した。このほかウズベキスタンはウランや天然ガス、キルギスは金や水銀、タジギスタンは希少金属のアンチモンや金、銀などの資源に恵まれている。

<シルクロード>

シルクロードは、太古以来、アジアと地中海世界を結ぶ歴史的な東西交易路に与えられた呼び名である。アレキサンダー大王が、漢の武帝が、ジンギスハーンが活躍し、玄奘やマルコポーロがたどった路でもある。さらに、日本に仏教が伝わり、正倉院の宝物の数々が運ばれてきた。オスマン帝国の栄華を物語る君主の居城トプカプ宮殿に並び伊万里焼の大きな瓶や壺、水差しなどもこの道を通して運ばれたし、奇想天外、波乱万丈な西遊記の舞台もこの地だった。

この地にシルクロードという言葉は初めて用いたのが、ドイツの地理学者リヒト ホーフェン（1833～1905）であった。彼は 19 世紀後半に、中国の各地を調査し、中国の地理書「中国」を書きあげた。この交易路を行き交ったのがシルクや宝石の玉、ガンダーラ文化、ペルシャ絨毯、



ガラスなどなど多岐にわたるが、その中で最も重要品がシルクであった。このことに注目し、ザイデンシュトゥラーセンと書き記した。この英語訳がシルクロード（silk road）である。

20 世紀前半まで古代の絹製品、絹取引に関する文書が見つかるのは、中央アジアのオアシス地帯に限られていたことから、シルクロードはオアシスを結んだルートを指していた。その後、中央アジア全域を調査したリヒト ホーフェンの弟子、

シルクロードデザインのシルクのスカーフ

スウェーデンのヘーデン（1865～1952）やイギリス人のスタイン（1862～1943）らによって交易路は、オアシスを結んだものだけでなく中央アジアの広い範囲に及び、イラン高原からイラク、シリアに出て海路や陸路でローマに達していたことを明らかにした。その後の研究から中国南方から海に出て東南アジアからイン

ド洋、アラビア半島に至る海路をも加えるようになった。

シルクロードとはいっても、単に東の中国と西のローマ帝国を結ぶ整備された一本の交易路ではない。山間部など通れるところが極端に制限されたところを除けば、大半は広漠とした沙漠や草原で、通ったところが路の状態であった。四方に伸びた網状のものであったと想像される。そして、網の結び目に当たるのが交易の要地で隊商都市に発達し、後に中国、中央アジア、インド、東南アジア各国の大小の都市へと変貌を遂げていった。いうなれば、シルクロードは単なる交易路というより、ユーラシア大陸中央部で暮らす人々の営む交易活動そのもので、線というより面に近いものであったと思われる。シルクロードは、下記の三つのルートにまとめられている。

* 沙漠の路（オアシスルート）

中国西域の天山山脈の北を通るのが「天山北路」で、比較的難易度が低いが距離が長くなる。南を通るのが「天山南路」で、沙漠の厳しさに加え 4～5,000m 山地を通る厳しいルートで知られる。さらにその南に横たわるタクラマカン沙漠の南を通るのが「西域南道」で、最も過酷なルートながら最短ということで利用者が多かった。

三つのルートとも程度の差こそあれ「上に飛鳥なく、下に走獣なし。・・・。但だ死人の枯骨を以て、慄慄と為すのみ」と沙漠の厳しい条件下のルートであったことに変わりはない。

* 草原の路（ステップルート）

オアシスルートが利用されるはるか以前から北緯 50 度付近の中央アジアの草原地帯を通る東西交易路が存在していた。モンゴルの草原地帯、ステップを横切り、カザフスタンを通りカスピ海一帯を通してトルコ北部の黒海周辺に達するルートである。ここはフン人、匈奴、突厥などの騎馬民族が活躍した舞台で、物資の交換、情報の伝達などが行われていた。この地で最も勢力を拡大したのでモンゴル族で、13 世紀にテムジンという一部族長が、君主を意味するハンに推薦されてチンギスハンを名乗り、この一帯の交易を支配し、オアシスルートをも含めて整備、拡大したことが知られている。モンゴルの支配地域は、東は中国から朝鮮半島、西は東ヨーロッパ、南はアフガニスタンからチベットまで及び、世界史上最大の帝国を築き上げた。その最大の強みは馬であった。馬は最強の軍事力であり、最速の移動手段であった。なかでも、血のような汗を流し、祖先が天馬の子とされる汗血馬で 1 日 500 km 走ると言われた。彼らは定住することがなかったので文書などを残すことが少なかったが、出土した黄金の鎧などを見る限り盛んに利用されていたことが窺われる。



騎馬民族の末裔 — カザフ民族の少年達

* 海上路（マリンルート）

インド南端を通るルートで、中国福建省から海に出て、東シナ海、南シナ海、インド洋、アラビア海を経てアラビア半島に達するルートである。隆盛を極めたシルクロードであったが、人間、ウマやラクダで運べる物資は限りがあった。航海時代に入ると「海」という中途に異民族を介することのない東西交易路で、徐々に取って代われ、衰退に向かう。

シルクロードの舞台の沙漠、オアシス、草原さらには騎馬民族、遊牧民も全てが、日本人には非

日常的なものであり、香しい文化の歩んできた路となると限りない夢とロマンを掻き立てられる。ところが、中国人にとっては、「西出陽関無故人」（西のかた 陽関を出れば 故人なからん）のイメージで厳しい自然と異民族との抗争の舞台、「西域」であって、シルクロードに抱くものは大きく異なるらしい。なお、中国語では「絲綢之路」と表記している。

＜ステップルートと黄金人間＞

2001 年、日本山岳会山形支部行事でカザフスタンのカルカラキャンプ行を実施した。ここは天山山脈最高峰、世界最北の 7,000m 峰のホバイダ峰（7,439m）や三角錐の秀麗な山容で大理石のハンテングリ峰（6,995m）へのベースキャンプであった。韓国インチョンから飛んでアルマティに着いたのは 23 時を過ぎていた。隊員の 2 名が入国審査で外貨持ち込み申告と現金の徹底した突き合わせがあった。全員通過まで 1 時間以上を要したこともあり、ホテルに落ち着いた時は日付が変わっていた。翌朝、ホテルから見るアルマティは、くっきりと天山山脈の支脈の山々をバックにした美しい街だった。

カザフスタンの人口構成は、カザフ人が 60%、ロシア人が 30%で、スターリン時代に強制移住させられたウクライナ人、ウズベク人、ドイツ人、ウイグル人や韓国人だという。そして、カザフスタンの国籍を持っている人たちをカザフスタン、カザフ国人と呼び、カザフ人はカザフ民族と呼び区別している。カザフ人は日本人と非常に似ている。印象としては韓国人や中国人よりも似ており、近親感を覚えた。

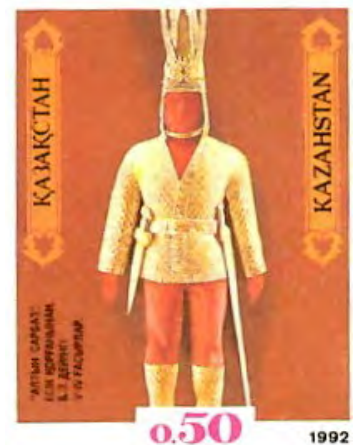
三つに大別されるシルクロードでもっとも古いのが草原の道、ステップルートであった。カザフスタン西部、カスピ海と旧アラル海の北方から北緯 50 度に沿ってカザフステップが広がっている。寒冷で強風が吹き抜けるところで樹木は育たず、荒涼とした不毛の大地でステップルートの中心でもある。ここからカザフ高原、アルタイ山脈の南麓をたどり中国に達するルートである。



カザフ高原の南に「リンゴの里」の意味を持つカザフスタンの旧首都、アルマディで、この国立中央博物館の目玉は、スキタイ戦士がゴールドの鎧を

アルマディからアラタウ山脈に向かう途中の草原を切り裂く車道

まとった「黄金人間」である。アルマディから東に 60 km のイシク クルガンで、紀元前 10～9 世紀のサキ族の古墳から出土したもので Golden Prince- Warrior と紹介されていた。4,000 枚以上の黄金のピースを頭から足の先まで黄金尽くめの装飾は、ステップルートの繁栄ぶりを示すものといえる。このサキ族だが、ギリシャ人のいうスキタイと同一なのか、あるいはサキ族の一派がスキタイとする説もあり、詳しいことは解っていない。そして、発掘は今も続いていた。



黄金人間の切手

シルクロードというと、莫高窟や敦煌文書で有名な敦煌や、沙漠に飲み込まれヘデンによって発見された楼蘭、さらにはウズベキスタンの「青の都」、「東方の真珠」と呼ばれるサマルカンドなど、史上に残る都市がある。いずれも定住農耕民族がつくったオアシス都市である。ところが、ステップルートとなると古い歴史を持ち、黄金人間が発掘された割には地味に感じられる。その原因は、定住性のないステップ騎馬民族や遊牧民族が主役で、風のように過ぎ去る軍馬や隊商が幅を利かせていたためだろうか。

<ここはキルギス領>

ヘリコプターは 4,000m の南イニルチェック氷河のうっすらと雪を被ったモレーン（堆石）にふわりと着陸した。右手に天山山脈（*）最高峰のポベータ峰がどっしりと座し、左には一枚の大理石が反り上がったハンテングリ峰があった。正面の山は、ヒマラヤ襷が白いカーテンの折り目の如く広がり昼の陽光を反射させていた。一通り景色を堪能し終え、一休みした時だった。キルギスのポリスによるパスポートチェックがあるという。地図を見ると、ポベータ峰の今眺めている北面はキルギス領で、背後は中国だ。ハンテングリ峰に至っては、そそり立つ南面はキルギス、北面はカザフスタンで、東面は中国領だった。人里はなれた氷河の山奥でパスポートチェックとは想像すらしなかった。パスポートはカルカラキャンプの嚴重に鍵のかかった倉庫の中だ。

ガイドが差し出した参加者一覧表に目を通した後、氏名、パスポート No、国籍、を確認し、台帳に記入し始めた。これで終了かと思ったら、一人一人にこれらの項目についての確認が始まった。パスポートはキャンプ地にあると伝え、不法入国は認められないと言いながらも目元は笑っていた。結論は、今回に限り見逃すが、口外しないことが条件だった。お陰で 4,000m を越す氷河地帯で花が咲き、蝶が舞う不思議な谷巡り、精霊の王 ハンテングリ峰の裾野までの氷河歩きを楽しむことが出来た。



4040m の高嶺に咲く花

（*）天山（テンシャン）山脈—Tien Shan は「天に至る道」の意味

<天山山脈 カルカラキャンプ最終日>

カザフスタンの南東部、キリギスとの国境に、世界最北の 7,000m 峰が聳えている。そのベースキャンプがカルカラキャンプである。4,000m のベースキャンプも、太陽が昇ると気温は急上昇する。キャンプでの食事や掃除担当のロシア人の金髪娘も黒髪のおばちゃんも下着姿で日光浴する姿があった。しかし、一端日陰になると気温は急降下し、たちまち厚手のセーター、羽毛服が必需品になる。そして、夜間は毎日のように降雪を見た。

食堂テントのテーブルには、草花が飾られ、毎日、サウナも使えて気持ち良く過ごせた。先ほどまで半裸で太陽と向きあっていたおばちゃんたちから、ベースキャンプで描いた水彩画と、陶器で作った伝説のハンテングリ妖怪のプレゼントがあった。

間もなく、静まり返った氷雪の山々にヘリコプターのエンジン音が響き渡った。モレーンの巨岩に身を寄せ着陸を待った。ヘリコプターはエンジンを止めることなく引き返すと言う。ザックを肩に掛け、地面を叩く風に逆らってヘリコプターに向かおうとした時、おばちゃんの

顔が目前にあった。突然、頬っぺたにキスが飛んできた。体はヘリコプターの風に揺れ、ザックで手の自由は利かず、お返しはまななかった。何か忘れ物でもしたような気持ちのまま機体へ乗り込んでしまった。

ヘリコプターが飛び立つ時
ハンテングリ妖怪
の風に耐え、手を振るおばちゃんの姿があった。



ハンテングリ山(*) (6,995m)

(*)「精霊の王の山」の意味全山大理石の山

<中央アジアと英語>

中央アジアの5ヶ国は、1991年ソ連の崩壊によって独立した国々である。第一言語はそれぞれの民族の言葉、第2言語はロシア語である。英語は学校で習わないので、個人的に学んだ人だけが話す。カザフスタンとキルギスでの経験だが5ヶ国とも同じだと思う。街でも英語表記を見ることはなかったし、英語が通じたのは入国審査の職員、レストランの女性マネージャー、それからお世話になった業者だけで、一般市民との会話は成り立たなかった。これまで旅した中で中国と並んで最も英語が通じなかった地域の一つであった。

モンゴル（モンゴル国）

中国とロシアに挟まれた内陸国で、モンゴル高原のうち外蒙古と呼ばれたゴビ以北の一带を国土としている。現在のモンゴルで国家創建の英雄とされているのがジンギスカンである。当時、大小様々な集団に分かれて争っていたモンゴルの遊牧民を一代で統一し、13～14世紀に当時の世界人口半数以上を統治した人類史上最大規模のモンゴル帝国の基盤を築いた。その末裔はモンゴル国内と中国の内モンゴル自治区に多く住んでいるモンゴル系民族である。言葉はモンゴル語で、宗教はチベット仏教である。19世紀清の支配下にあったが、1911年の辛亥革命や1917年ロシア革命

などに翻弄され、その後の内戦を経て、1924年にロシアの援助を得て社会主義のモンゴル人民共和国が誕生した。1989年末、ソ連と東欧情勢に触発されてモンゴル国と改称し、社会主義を放棄し資本主義になった。その後の貧富の差拡大や社会主義当時から続く汚職体質で民主化の道はかなり険しい。

国土は西に標高 4,000m を超すアルタイ山脈が横たわり、その東に 1,000~1,500m のモンゴル高原が広がっている。他は高山沙漠と丈の短い草が生えるステップで標高 1,000m のゴビまで続いている。国土の 4/5 は草原ステップで放牧、遊牧に利用されている。主要産業は牧畜とモリブデンや石炭などの鉱業である。

＜裏シベリア鉄道＞

シベリア鉄道は、モスクワとウラジオストック、アジアとヨーロッパロシアを結ぶ大陸横断鉄道で、全長 9,297 km で世界最長の鉄道である。この本線に対して、ウランバートル経由で北京とモスクワを結ぶ鉄道は「モンゴル縦貫鉄道」で、通称「裏シベリア鉄道」と呼ばれていることを知った。ペキンとウランバートル間の 1,561 km を、面倒な出入国手続きを含めて 30 時間も要した。20:30 過ぎ、発車して 12 時間が経過した頃、中国の国境駅エレンホト、二連浩特に着いた。緑の制服の武装警察と係官がやってきた。無表情でパスポートを回収し、コンパートメント内の荷物置き場、ベッド下の荷物入れまでくまなく調べ始めた。出国手続きの後には、中国とモンゴルの線路の軌間、ゲージが違うため列車の台車交換である。

中国、モンゴル、ソ連を結ぶ鉄道建設は 1953 年に始まり、1960 年に開通した。国防上の理由からソ連の指導の下で進んだモンゴルのゲージは広軌の 1,524 mm、中国国内のゲージは日本の新幹線と同じ 1,435 mm となった。ゲージ差 89 mm は、レール幅が広いというか、太いのでスピートを出さなければ双方の車輛とも使用可能範囲だという。従って、台車交換は同じ線路上で行われていた。およそ 200m もあろう専用の建物に入った後、1 輦ずつに切り離され、ジャッキアップの場所まで送られる。車輛の両端を持ち上げ、モンゴルの台車が、機関車に押されて車輛の下に入っていく。同時に中国側の台車は弾き出されて建物の外へと出ていく。車輛と台車が合うように調整し、ジャッキを降ろしてしっかり繋ぐ。この一連の作業は、30 分ほどであった。

0:25、台車交換の終えた列車は、モンゴルのサミンウデ (Zanyn-Ude) に静かに滑り込んだ。直ぐに女性の入国係官にパスポートと入国カードを渡しに来た。その後中国側同様兵士による細部にわたる厳しいチェックがあった。国境の駅を出発したのは 1:40 だった。両国の国境通過に要した時間が、何と 5 時間強であった。長いながい一日がようやく終わった。

列車の単調な揺れが眠りを誘った。暑さで目を覚ました時には陽は高く上っていた。茶色に染まった草原が、車窓一杯に広がって



いた。この広大なモンゴル高原を走る列車が、右に左にカーブする。丘陵を削って線路を直線に通すより、自然の地形に沿っているためだという。

車窓に流れる大自然の中に、遊牧民の移動式住居、ゲルが突然現れた。しばらくして、ゲルと家屋と家畜の囲いが並存し始め、丘陵が遠退き徐々に集落が大きくなってきた。そして、ゴミの散乱と共に大きな建物が見えるようになり、間もなくウランバートルだった。ホームへの立ち入りは自由で、降りる人、乗る人、出迎えと見送りの人々でごった返していた。

<食の季節感>

昼食を求めて街に出た。昼に混みあった跡の残る食堂は、羊脂の匂いが満ち、テーブルは脂で光っていた。モンゴル人が日常的に食べているものは、羊肉を中心とする肉、小麦粉、塩を基本としたシンプルなものだ。オーストラリア人 5、ニュージーランド人 3、日本人 1 で、12 品を注文した。最初に出てきたのは塩の入ったモンゴル版ミルクティー、スーテーツァイだった。そして、ボーズ、中国の小籠包と同じで小麦粉の皮に羊肉を包み蒸したものの、巨大な餃子を油脂で揚げたもの、スープ類、麺類、肉料理と食べ比べた。最後に、残っているものを食べようとしたが、熱々の時は感じなかった強烈な羊の臭いが鼻をついた。

日本人は典型的な魚食民族である。食べ方も加工の仕方も様々だし、季節によって食べる魚も違う。7、8 年前、ホームステイしていたモンゴルの高校生に、肉食民族にもこのような傾向があるのかと尋ねたら、なしの答えだった。強いて言えば、馬は冬に食べる回数が増えるかな?!だった。ローカルガイドによると、遊牧民の間では、冬季は「赤いもの」すなわち肉で、夏は「白いもの」で乳製品と教えてくれた。



ボーズ：モンゴル風蒸し餃子



ホーショル：巨大揚げ餃子

<ゲル>

峠に神が宿するという大きな積石があった。中央に一本の柳の柱が建ち、経文が記された五色の布をなびかせていた。ここを通る車も、馬も止まり、右回りに廻る。ひと回り毎に石を積み、ここまでの安全に感謝し、これから先の安全を祈願するオボーで、チベットのタルチョと同じものだった。

峠を越えると岩山が横たわり、カラマツの葉は黄色に変化しはじめていた。ここはウランバートルから 55 km、国立公園内のゲルキャンプ地である。無限に広がる草原を生活の舞台にする遊牧の民を支えてきたゲルはツーリストキャンプとなっていた。



オポーは草原の民にとって道祖神的なもの



外張りのフェルトとハン 右上の白布は内張り

ゲルの大きさは、家屋の壁に相当するハンの数で決まる。ハンは折り畳めるように幅狭い板からできており、交差するところはラクダの皮を硬くした止目具を用いていた。ゲルを覆うフェルトは雨の国の日本人にはなんとも心もとなかった。ゲルの入口は全て南向きで、3つの簡易ベッドが用意されていた。入口正面奥は主人、左側が男あるいは客、右が女、子供と聞き、日本の囲炉裏を囲む横座、客座、かか（母）座と似ていた。

ゲルキャンプ場入口に、黒牛1頭のなめし皮が地上1.5m位の所に張られていた。後に弓遊びの的であることを知った。昔からモンゴル男子の遊びの代表は、弓、馬、角力の3つだという。和弓よりは極端に短いのは騎射に適しているからだという。弓の材質は柳、弦は鹿の皮で、形状は中央部がくびれていた。



丘を越えて他のキャンプ地往復2時間の乗馬を楽しんだ。小柄な馬から鞍を外した時、ほんのりと湯気がたち、汗で毛並みが濡れていた。モンゴル人と馬との関係、労のねぎらい方、尻をぽんと叩かれ仕事から解放された馬の表情などを見ていると、微笑ましいほどの感情の濃さが伝わってきた。

夜明け前、外に出た。地平線から空いっぱいに星空が広がっていた。子供の絵のように一つ一つの星がごつごつと降り注ぐように輝いており、美しさを通り越し恐怖を覚えた。

<ギネス認定「世界1寒い首都」>

ウランバートルでローカルガイド宅訪問の機会に恵まれた。街外れは家庭用石炭と薪売場で、車がひっきりなしに出入りし、手、顔を黒くした人々が厳しい冬に備えて忙しく動き回っていた。ウランバートルの最寒月1月の平均気温が -26°C で、ギネス認定「世界1寒い首都」だという。内陸に加え、北緯48度と高緯度（日本の最北端・宗谷岬 $\text{N}45^{\circ}31'$ ）、さらに標高1,350mと三拍子揃っているためだ。訪れた時は9月、陽だまりは気持ちの良い温もりがあった。車を降り小路を一曲がりしたところに、家屋とゲルが建っていた。ゲルに通されて直ぐに、モンゴル版ミルクティーのスーティツアイと



国民的な食べもの、巨大な揚げ餃子のホーショール（fried dumplings-huushuur）でもてなしてくれた。

民族衣装のモンゴル服、デールを、オーストラリアの若者をモデルに着せてくれた。襟を左前で合わせ、右肩のボタンをかけ、細く柔かい帯をしっかりと留める。日本の着物よりは中国服に似ているが、スリットがない。中央部に突起のある帽子、ジャンジャン マルガイを被った。帽子に施された刺繍、アラフチ刺繍が話題になると、デザインそのものは、どこかアイヌの模様と似ている感じもするが、モンゴルに住むカザフ族が作るものだという。大胆な色の使い分けが気に入った。これをモチーフにしたクッションカバーをモンゴルの記念に買い求めることを決めた。

＜チベット仏教とウランバートル＞

ウランバートル最終日、チベット仏教の大きな僧院、ガンダン廟に向かった。1921年のモンゴル革命までは、モンゴル民族の精神的支えとして繁栄を極めたというが、繁華街の賑わいからは隔絶した一画だった。廟内は、チベット教独特の宗教的壁画で飾られ、一種異様な雰囲気漂っていた。近在から集った老若善男善女で込み合い、20数mもの観音立像が見下ろしていた。香煙が満ち、10数人の僧侶たちの読経が響きわたる中、人々は一心に祈り、供物を捧げ、僧侶から言葉を受けながら人の波に押されながら右回りに、ゆっくりと途絶えることなく流れていた。



屋外にはいくつかの建物があり、その脇に大きなマニ車、回すだけで中に納められている経を読んだことになるという便利なものがいくつも並んでいた。ここでもぶつぶつと経を唱えながら右回りの流れがあった。

結婚式で着飾った人々、木蔭で寄り添う人々、ハトに餌を与える人々、一家での記念撮影に身を正す人々、ご神木の割れ目に指を入れて祈る人、みんな幸せそうに見えた。きっとこの地は人々にとってこの上ない安らぎの場なのだろう。

街には人が溢れ、道路は車で埋め尽くされていた。モンゴルの人口は347万人（2024）、右肩上がりで増加し続けているが、これはウランバートルの現象で、田舎では人口停滞傾向だという。しかも、人口の45%がウランバートルに集中している。これを反映してか、ウランバートル及び近郊は、至る所で道路工事やビル建設中であった。宿泊していたサンホテル前でも3階建てのビル建築中だった。日本で見かける建築現場の鉄筋に比べると、全く建築の技術も知識もないが極端に少ないことが解かる。もし大地震に見舞われたら建物の倒壊は日本の比ではないことは明らかだ。そう思うと、昨日泊ったゲルは、何百年という長い歴史に学んだ安全な住居に思えた。

